

季節の変化が鮮やかと言われることもある北国でも、ここ竹山での一年を振り返ってみると、春夏秋冬という一年の区切れ目があるというより、連続する変化の流れの中でいつの間にか春になり、夏になりしているような気がしてくる。特に植物たちは、常に一歩先を意識しながら今すべきことをひとつひとつ律義に行なっている。それが一年の大きなサイクルをつくっているのだ。

そんな植物たちについて、これまで触れてこなかったものも紹介したい。といつても何度も白状しているように、植物についてはまったく音痴で、特に草花は皆目ダメだったのだから偉そうに「紹介する」というより、こんな草花があったんだという私の驚きにおつきあいいただくことになるのだが。

町内のお宅をは拝見すると家の前に色とりどりの草花が綺麗に植えられている。それに比べ我が家は草ぼうぼうで一見放置された空き地に見えなくはない。それは、敷地の大きさからきちんとした庭をつくるのは体力的にいっても無理があるし、何度も触れているが園芸種などが育つ土や水はけが期待できない土地なのだ。それをよく知っているMさんは、どこからかフタリシズカ、ニリンソウ、ユキザサ、ヤマシヤクヤク、フウチソウ、コケモモ、シラタマノキ、宿根のヒマワリなどを「これ植えない」と持って来てくれる。それらが我が家に彩りを添えてくれているのだが、それ以外にも勝手にやってきて自分の居場所をつくっているのがある。いわゆる雑草というやつだ。

「雑草という名の草はない。」という牧野富太郎の言葉は有名だが、雑草という草は無いわけではなさそうだ。なんせ日本雑草学会という歴史のある学会がある。もちろん雑草それぞれに名前はあるのだが、雑草という類型が学問的に認められているのだ。では、雑踏とは何を指すのか。これはどうも歯切れが悪そうだ。アメリカの雑草学会では「望まないところに生える植物」をさげているようだが、望むか望まないかは主観的な問題で同じ植物でも雑草になったりならなかったりしてしまう。わたしたちの敷地で言えば植物が生えるのが望まない場所は特にないので雑草は無いことになる。別の定義では「絶えず攪乱される極めて不安定な環境に生活する一群の植物」というのがあるようだ。田畑の草刈りをしてまた出てくる植物などが思い浮かぶ。さらに「絶えず外的な干渉や生存地の破壊が加えられていないとその生活が成立、存続できないような一群の植物」というかなりマゾな定義もあるようだ。過酷な環境では育たない植物というのはわかるが、その逆はいったいどういうことを言っているのか興味深い。

私たちの敷地でいえば家を立てるために大量の碎石を積んだところがある。駐車スペースや通路として使っているので極めて植物には不向きな環境である。仮に花を植えようとしてもそのままでは育たないところなので、ちよつとした花壇をつくった時も五十センチメートルくらい掘って土を入れなければならなかった。それがなぜか、数年経った今はいろいろな草花を見ることができ。それを雑草と言わせていただければ紹介したいものがある。

